

「日本刀歌」小考

渡辺, 宏明

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

1997-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004574>

「日本刀歌」小考

渡辺 宏明

はじめに

本稿の目的は、日本刀及び日本刀を用いる武術を媒介とした、日中の文化交流について考察することにある。まず、中国で詠まれた、日本刀を題材にした詩について述べ、次に、日本刀を中心とした日中相互の交流について述べる。

一、「日本刀歌」について

中国の文人が日本刀について詠んだ詩について述べた論文で、最も多くの詩を取り上げているのは、筆者の知る限りでは、石原道博「日本刀歌七種——中国における日本観の一面——」¹⁾である。これには、宋代の歐陽修（あるいは司馬光の作とも言われる）の「日本刀歌」、明代の唐順之の「日本刀歌」、王穉登の「楊伯翼贈日本刀歌」、清代の陳恭尹、梁佩蘭、黃遵憲の「日本刀歌」、沈德潜の「筵上看日本刀」の七種が挙げられている。

その中で、唐順之と王穉登のものが、小説『大菩薩峠』で知られる中里介山の『続日本武術神妙記』（一九三六

年)に、独自の資料から引用されている。

中里介山は、日本の武術について造詣が深く、数多くの史料を蔵しており、それをもとに『日本武術神妙記』(一九三三年)と『続日本武術神妙記』を著した。『日本武術神妙記』の「序文」には、「これは御覧の通り日本武術の名人の逸話集である、創作ではない、取り敢えず著者所蔵本の一部分から忠実に抜き集め、それを最も読みよきように書き改めたまでであるから著というよりも編ということが、ふさわしいかも知れない」と述べている。

このうち、『続日本武術神妙記』の末尾近くに、「支那人の日本武術観」として「揮刀如神」と「日本刀歌」二首を載せている。「日本刀歌」といえば、我が国では宋代の歐陽修の作と言われるものが知られているが、中里介山はそれは収めておらず、唐順之と王穉登のものを収めている。

「揮刀如神」は、「倭寇の盛んなりし頃、明将の記文のうちに曰く」として、倭寇について述べた文の書き下し文である。『日本武術神妙記』では、一編一編出典を明示していたが、『続日本武術神妙記』ではそれをやめてしまっている、出典は不明である。

「日本刀歌」も同じく出典は記していないが、作者名は明記してある。介山の蔵書の内より発見したものであろうが、その書籍自体が誤っていたのか、介山が原稿執筆の際に書き誤ったのか、意味の判然としない所など、原詩と異なると思われる点がある。まず、『続日本武術神妙記』のものを引いておく。返り点も同書のをそのまま使用した。

日本刀歌 唐順之

有客贈我日本刀

魚鬚作靶青糸練

重々碧海浮渡來

身上竜文雜藻行

振然提刀起四顧
白日高々天問々
毛髮凜冽生鷄皮
坐失炎蒸日方永
聞說倭貲初鑄成
幾歲埋藏擲深井
日淘月煉火氣尽
一片凝水闔清冷
持此月中斫桂樹
顧兔應知避光景
倭夷塗刀用入血
至今斑点維能整
精靈長与刀相隨
清霄恍見夷鬼影
爾來韃韃頗驕黠
昨夜三闕又聞警
雖能將此白竜沙
奔胆一斬单于頸
古來神物用有時
且向囊中試鞞鞞

同 王禪登

揚郎手持一匣霜
 贈我扨拭生寒芒
 鉛刀紛々空海目
 君与此鏢皆魚腸
 南金換却東夷鉄
 上帶倭奴爛體血
 血未曾消刃未手
 皎若蓮花浸秋月
 燈前細看鵬鶴斜
 入手還疑虬与竜
 門外湖深恐飛去
 朱繩夜縛青芙蓉
 苔花爛斑士花紫
 白虹沉々臥寒水
 婦家不惜十年磨
 他日還能報知己

中里介山の引いているものは、「日本刀歌七種」のもの、あるいは他の資料のものと比べてもいくつかの異同がある。次に、唐順之のものをその著作集『荆川先生文集』より引き、書き下し文を付しておく。

有客贈我日本刀（客有り我に日本刀を贈る）

魚鬚作靶青糸綆（魚鬚にて靶つを作なす青糸の綆）

重重碧海浮渡来（重重碧海を浮渡来し）

身上竜文雜藻苻（身上の竜文は藻苻を雜まう）

悵然提刀起四顧（悵然と刀を提げ起ちて四顧すれば）

白日高高天罔罔（白日は高高として天は罔罔たり）

毛髮凜冽生鷄皮（毛髮凜冽して鷄皮を生じ）

坐失炎蒸日方永（坐して炎蒸を失い日は方に永し）

聞道倭夷初鑄成（聞道きき倭夷は初め鑄成し）

幾歲埋藏擲深井（幾歲か埋藏し深井に擲す）

日淘月煉火氣尽（日淘月煉して火氣尽きれば）

一片凝水闔清冷（一片の凝水清冷と闔う）

持此月中斫桂樹（此を持ち月中に桂樹を斫きれば）

顧兔応知避光景（顧兔は応に知るべし光景を避くを）

倭夷塗刀用人血（倭夷は刀に塗るに人血を用い）

至今斑点誰能整（今に至れば斑点誰か能く整えん）

精靈長与刀相隨（精靈の長は刀と相い隨い）

清霄恍見夷鬼影（清霄は恍として夷鬼の影を見みす）

邈來韃靼頗驕點（邈來韃靼たつぎん頗る驕點）

昨夜三関又聞警（昨夜三関に又警を聞く）

誰能將此向竜沙（誰か能く此を將つて竜沙に向かい）

奔騰一斬单于頸（奔騰し一たび单于の頸を斬らん）

古来神物用有時（古来神物用うるに時有り）
且向囊中試鎗類（且つは囊中に向かい鎗類を試みん）

他書との異同について。

- 一、「古今圖書集成」二百八十七卷、「列朝詩集」（清・錢謙益）には、同一のものを引く。
- 一、「淵鑑類函」卷二百一十五「武功」では、第九句「倭夷」を「倭人」とし、「顧鬼応知避光景」までしか載せていない。

一、「日本刀歌七種」に『隣交徵書』より引かれているものでは、第二十二句「奔騰」を「奔胆」とする。

作者の唐順之（一五〇七〜一五六〇）は嘉靖の会試で第一となり、翰林院などを経た後、文官ながら最前線に立ち、胡宗憲らとともに倭寇撃退に活躍した人物である。武術に造詣が深く、「楊教師鎗歌」「峨帽道人拳歌」など武術を取り上げた詩の他、著に「条陳衝練兵事宜」などがある。名將として知られる戚繼光（一五二八〜一五八七）は、唐順之に鎗を学んだことがあり、その時のことを次のように述べている。³³

巡撫荆川唐公於西興江樓自持鎗教余、繼光請曰、「每見他人用鎗、圈串大可五尺、兵主独圈一尺何也？」荆翁曰、「人身側形只有七八寸、鎗圈但拿開他鎗一尺、即不及我身膊可矣。圈拿既大、彼鎗開遠、亦与我無益、而我之力尽。」此說極得其精。余又問、「如此一圈、其功如何？」荆翁曰、「工夫十年矣。」時龍溪王公、龍川徐公、皆感服。一芸之精、其難如此！

（巡撫の唐荆川公が西興の江樓で、自ら鎗を持って私に教えてくれた。私が、「ほかの人は、鎗を用いるのに、五尺ほど回して突きますが、あなたさまだけが一尺なのはどうしてなのでしょうか」と尋ねると、唐公は、「人体の側面はわずか七、八寸だ。鎗はただ一尺回して相手の鎗をはらえば、我が身には当たらない。大きく回せば、相手の鎗を遠く払い、自分に無益であり、力も尽きてしまう」と言う。その奥妙を極めた言葉である。また、「この回し方は、どのようにして得られました」と尋ねると、「十年鍛錬した」と言う。その時居合

わせた王龍溪公、徐龍川公もみな感服した。一芸に精通するというのは、かくの如く困難なものなのだ。
 王禪登の詩について、中里介石は唐順之の作に続けて「同」としているので、同じ「日本刀歌」という題と思っ
 ていたようだが、これは、「楊伯翼贈日本刀歌」という題である。次に、これを『列朝詩集』より引き、書き下し
 文を付す。

楊郎手持一匣霜（楊郎手に一匣の霜を持ち）

贈我払拭生寒芒（我に贈り払拭して寒芒を生ず）

鉛刀紛紛空滿目（鉛刀紛紛として満目を空にし）

君与此鏢皆魚腸（君と此の鏢とは皆魚腸なり）

南金換却東夷鉄（南金は東夷の鉄と換却し）

上帯倭奴髑髏血（上に倭奴の髑髏の血を帯ぶ）

血未曾消刃未平（血は未だ曾て消えず刃は未だ平らならず）

皎若蓮花浸秋月（皎若たる蓮花を秋月に浸し）

燈前細看鷓鴣鋒（燈前に細かに看みる鷓鴣の鋒）

入手還疑蛟与竜（入手し還た蛟と竜かと疑う）

門外湖深恐飛去（門外の湖は深くして飛び去るを恐れ）

朱繩夜縛青芙蓉（朱繩には夜には青芙蓉を縛す）

苔花爛斑土花紫（苔花は爛斑にして土花は紫）

白虹沈沈臥寒水（白虹は沈沈として寒水に臥す）

婦家不惜十年磨（家に帰ります十年磨けば）

他日還能報知己（他日還た能く知己に報わん）

他書との異同について

一、「日本刀歌七種」に『隣交徴書』より引かれているものでは、第一句「楊郎」を「楊郎」とし、第九句「鵬鵠」を「鵬鵠」とする。

王稱登は、詩文の世界で名を知られ、万暦年間には、国史の編纂に携わっている。嘉靖三十九年に卒した唐順之と同時代の人というわけではない。

なお、この詩のうち「鵬鵠」は、中里介山の引くものも「日本刀歌七種」に引くものも「鵬鵠」となっているが、「鵬」の字は、諸橋「大漢和辞典」にも、中国の「漢語大字典」にも見られない。これはおそらく「鵬鵠」が正しい。「鵬鵠」は「鵬鵠」とも言い、その油を刀に塗って錆を防ぐものである。

「日本刀歌七種」に挙げられたものうち、最も古いものは歐陽修（一〇〇七〜一〇七二）の作といわれているものであるが、この論文に挙げられたもののほかに、歐陽修と同時代でわずかに年長の梅堯臣（一〇〇二〜一〇六〇）にも、日本刀を詠んだものがある。その作を集めた『宛陵集』（宛陵は梅堯臣の号）巻五十五に収められている「錢君倚學士日本刀」がそれである。次にその詩と書き下し文を示す。

日本大刀色青熒（日本大刀色は青熒）

魚皮帖欄沙点星（魚皮を欄に貼り沙を点星す）

東胡腰鞘過滄海（東胡は鞘を腰にし滄海を過ぎ）

舶帆落越棲灣汙（舶帆を越に落とし灣汙に棲まる）

売珠入市尽明月（珠を売るものは市に入り明月を尽くし）

解條換酒瑠璃瓶（條を解き酒を瑠璃の瓶に換う）

当墟重貨不重宝（当墟「酒売り」は貨を重んじ宝を重んぜず）

滿貫穿銅去求好（滿貫の穿銅求好を去る）

會稽上吏新得名（會稽の上吏は新たに名を得て）

始將伝玩恨不早（始めて將に伝玩せんとし早からずを恨む）

歸來天祿示明游（歸來して天祿は明游を示し）

光芒曾射扶桑島（光芒は曾て扶桑の島を射る）

坐中燭明魑撒遜（坐中燭明に魑チは撒遜し）

呂虔不見王祥老（呂虔は王祥老を見ず）

古者文事必武備（古は文事に必ず武備あり）

今人褒衣何足道（今人の褒衣何ぞ道みちうに足りん）

干將太阿世上無（干將太阿は世上に無けれど）

扞拭共觀休懊惱（扞拭し共に觀みれば懊惱おぼを休む）

工芸品としての日本刀が高く評価され、高く買入れられていたことを窺い知ることのできる詩である。

二、文化交流の中の日本刀

唐順之のように、倭寇を防いだ人物が日本刀を所有していたとなると、敵からの戦利品かとも思われるが、明代に倭寇が猖獗を極めたのは事実としても、ただ一方的に荒らし回っていたわけではなく、それと平行して日中間の貿易も行われていたので、買求めた品と考えられる。

日本からの輸出品には、日本刀も含まれており、十五世紀には、毎年のように数万本も輸出されていた。中には、最初から、対明輸出用に作られ、値段が切り込んである日本刀もあった。⁽⁵⁾

日本刀の輸出は宋代から盛んで、宋代の総輸出量は二十万本にのぼるといふ。⁽⁶⁾唐順之、王穉登も、それらの輸入品を手に入っていたのだろう。倭寇が手にしていたような実用だけが目的の日本刀では、詩題とするに足るような工芸品的価値には乏しいのではないだろうか。

輸出されたのは、日本刀だけではなく、明代には、日本刀を用いる戦術も中国にもたらされた。その代表が、

中国で「苗刀」と呼ばれている武術である。

「苗」とあるが、雲南地方に住む少数民族「苗族」とは無関係で、「単刀」「倭刀」あるいは「長刀」と呼ばれていたものが、民国以後なぜか「苗刀」と呼ばれるようになったものである。

明代に、浙江の劉雲峰が日本人から伝授され、後に程宗猷（一五六一〜？）が整理して『單刀法選』を著して広まった。『中国武術大辞典』によれば、刀を両手で持つ、というところに特徴があり、片手で刀を操るのが普通だった中国武術に新しい技をもたらしたという。一九二七年に、武術振興のために設けられた中央国術館でも学生用の教材の一つとなり、今日でも伝えられている。

一方、伝授という形ではなく、日本の武術書を手に入れて技法を取り入れた武人もいる。戚継光がそれで、嘉靖四十年（一五六一）の辛酉の年に倭寇との戦いの際に、日本の武術書を入手し、それをもとに「長刀」の用法を編み出し、兵士に教授した。その武術書は、十四巻本の『紀效新書』に「此倭夷原本、辛酉年陣上得之」として、そのまま収録してある。それを見るに「影流之目錄」とあり、「猿飛」「猿面」の技法名とその説明文、そして図が示されている。「影流」とあるが、これは「陰流」のことで、愛洲移香齋（一四五一〜一五三八）の開いた流派である。愛洲移香齋は三十六歳の時、神が猿の姿で奥義を示し、一巻の書を受けたことにより一流を開いたという。また、彼自身、一時は倭寇の一員として大陸にも渡っていたという。『紀效新書』には、戚継光が対倭寇戦用に編み出した戦法も収められており、そのために日本武術を研究したらしい。

ただし、当時の刀法が中国よりも日本の方が進んでいたとは限らない。陰流の流れを引く新陰流の上泉伊勢守秀綱の門弟（あるいは伊勢守の門弟の奥山休賀齋の門弟）の小笠原玄信齋は、仕えていた豊臣家の滅亡後、明に渡り、刀法を学んで「八寸の延金」という技法を考案した。帰国後、彼にかなうものはなく、柳生石舟齋も、玄信齋の型を見て、「我が国の剣術の水準では破ることはできない」と言った⁽⁸⁾という。また、先に述べた愛洲移香齋も、倭寇として大陸に渡った経験を経た後に一流を開いており、大陸の刀法に影響を受けた可能性を拭い去ることはできない。

後に鄭成功や黄宗羲が日本に援助を求めたように、国家間では敵対関係はなく、交流があった。また、倭寇は大きな問題であったはずなのだが、一般人の、倭寇あるいは日本というものについての理解はそれほど深かったわけではなく、陳忱の『水滸後伝』や、馮夢龍の『楊八老越国奇逢』(『古今小説』所収)に見られる倭寇は、まさしく「東夷」と称すべき理解しがたい蛮族あつかいである。

また、「楊八老越国奇逢」の挿絵⁽¹⁰⁾では、倭寇は確かに日本刀を振り回してはいるが、両手に一本ずつ同じ長さの刀を持っている。二刀流ということになると、長短二本の刀を用いる姿が思い起こされるが、中国側の資料に、倭寇が二本の刀を使うという記述は多い。例えば、「刀は長さ五尺余り、双刀を用いれば則ち丈余の地に及ぶ」「一手は双刀を舞わず。刀は長さ五尺余り」などとある。一方、長短二本の場合もあり、「諸の出入りには、必ず長短の二刀を佩く」という記録もある。ただ、この挿絵は、中国の双刀と同じようなものと誤解しているものと思われる。二本も刀を持っているながら鞘が描かれていない。抜き身の刀を二本手にしたままでは移動中は危険であるし、戦利品を得ても運搬のしようがない。中国では、一般兵士が持つような大刀は、「切る」というよりも「叩き割る」という使い方をするため、日本刀ほどは鋭利でなく、剃き出しで腰に差すこともあったので、倭寇も同じと考えたものと思われる。

また、唐順之や戚繼光の詩や文には、倭寇に対する感情は見られない。「日本刀歌」は、いつ作られたものかは不明だが、倭寇と戦い功を成した人物にしては、「東夷」という語は見られるものの、日本刀を工芸品として評価し、「韃靼」「单于」など、むしろ北方の異民族の脅威を述べている。戚繼光も、日本武術を研究し、倭寇の戦法についての分析は行なっているが、『紀效新書』には日本人に対する憎悪の言葉はなく、論評は行なっていない。

伝統的に、中国人からすれば、自分たち以外は「夷」であり、対等とは考えなかったわけであるが、日本刀という工芸品には工芸品としての価値を、武術には武術としての価値を見出し高く評価しているのは興味深い事実である。

(なお、本稿は、教育公務員特例法第20条第3項に定める研修の成果である)

〔注〕

- (1) 「茨城大学文理学部紀要」人文科学 第十一号。
- (2) 『四部叢刊初編集部』所収。
- (3) 戚繼光『紀效新書』「長兵短用說篇」。
- (4) 「四部叢刊初編集部」『宛陵先生集・伊川擊壤集』。
- (5) 福永醇劍『刀鍛冶の生活』。
- (6) 習雲太『中國武術史』。
- (7) 『紀效新書』には、嘉靖三十九年（一五六〇）に著された十四卷本と、後に四卷増補した十八卷本、さらにそれに改訂を加えた十四卷本がある。最も流布しているのは十八卷本であるが、「長刀」について記しているのは、後から出た十四卷本で、明末の茅元儀が編纂した『武備志』には、十八卷本ではなくこれが収められている。
- (8) 綿谷雪『新・日本剣豪100選』。
- (9) 戸部新十郎『兵法秘伝考』及び、松田隆智『謎の拳法を求めて』。
なお、玄信斎の流派は、その後、「真新陰流」として伝えられ、その門弟針ヶ谷夕雲は、「八寸の延金」の技法を伝授はされたが、それには否定的な態度をとり、その後、伝えられることはなかった。
なお、柳生石舟齋云々については「謎の拳法を求めて」にのみ見られる。小笠原玄信斎と針ヶ谷夕雲との関係については「夕雲流剣術書」（『武道傳書集成』所収）に詳しいが、柳生石舟齋云々については同書にも見えない。
- (10) 『宋・元・明通俗小説選』所収。内閣文庫所蔵本によるもの。
- (11) いずれも『明代倭寇考略』に引かれたものから。
- (12) 石原道博『倭寇』に引く「日本一鑑」。

参考文献

○書籍

- 錢謙益『列朝詩集』上海三聯書店。一九八九年。
 『四部叢刊初編集部』台湾商務印書館。一九六五年。
 陳懋恒『明代倭寇考略』人民出版社。一九五七年。
 戚繼光『紀效新書』（馬明達・校訂）一九八八年。人民体育出版社。

習雲太『中国武術史』人民体育出版社。一九八五年。

『中国武術大辞典』人民体育出版社。一九九〇年。

『古今圖書集成』（東京都立大学所蔵）

『淵鑑類函』（東京都立大学所蔵）

福永醉劍『刀鍛冶の生活』。雄山閣出版。一九九五年。

石原道博『倭寇』吉川弘文館。一九六四年。

二木謙一『年表戦国史』新人物往来社。一九七八年。

綿谷雪『新・日本剣豪御選』秋田書店。一九九〇年。

綿谷雪・山田忠史『武芸流派大辞典』新人物往来社。一九六九年。

戸部新十郎『兵法秘伝考』新人物往来社。一九九五年。

松田隆智『謎の拳法を求めて』東京新聞出版局。一九七五年。

『宋・元・明通俗小説選』平凡社。一九六〇年。

筑波大学武道研究会『武道傳書集成』第二集。一九八八年。

吉川幸次郎『宋詩概説』岩波書店（『中国詩人選集』二集・第一卷）。一九六二年。

中里介山『日本武術神妙記』河出文庫。一九七五年。

○論 文

石原道博『日本刀歌七種——中国における日本観の一面——』（茨城大学文理学部紀要）「人文科学」第十一号。一九六〇年）

石原道博『中国における隣好的日本観の展開——唐・五代・宋時代の日本観——』（茨城大学文理学部紀要）「人文科学」第一二号。一九五二年）